

こうとしている産地なのである。それだけに漆の確保は死活の問題となる。毛沢東の写真は日中両国間の不正常な状態に対する業者のあせりのあらわれであろうか。そのように考えたとしても奇異な感じは残る。文化大革命下の中国ならいざ知らず、この日本において、貿易の促進という要求がそのまま相手国の指導者に対する崇拜とは結びつかないからである。組合の人に毛沢東の写真を飾る理由をたずねてみようとも思ったが、何んとなく失礼にあたるような気がしてついそのままにしてしまったのは残念であった。毛沢東の写真が飾られた理由はともかくとして、漆の国内自給率が10%であることに問題がある。平沢の組合からいただいた資料によれば、徳川時代にこの付近を統治していた尾張藩では漆器生産を保護奨励し、材料のヒノキのほかに漆樹についても担当者において植林させたという。漆樹の育成は現代の日本の林業にとってどれほどの意義をもつのか筆者はつまびらかにしていないが、漆器工業にとって重大な関心事であるばかりでなく、国内産業の保護、あるいはつりあいのとれた経済の発展のために、短期的な採算を度外視しても国が責任をもって行わなければならない事業の一つかも知れないのである。

## キャンパスの花（承前）

貝山久子

夏になると図書館へ行くのがたのしい。それは図書館前の芝生の中にねじ花が可愛い花を咲かせるからである。ねじ花はその名前の通り、丈10～20センチほどの莖にピンクの筒型の小花がぐるりとラセン状にねじれてつく。まき方は右まきも左まきもあるようだが、大体1週間位しか花の期間がないので、一寸ごぶさたしているとすぐ終わってしまう。まだかまだかとためつすがめつ中腰になって芝生をすかしてみる私を、学生が不思議そうに眺めて通りすぎる。ねじ花は学生会館の横の芝生の中にも沢山あり、ラン科の多年生草木で、古今和歌集の“みちのくのしのぶもじずりたれゆえに、みだれそめにしわれならなくに”のしのぶもじずりに似ているので、モジズリ、モジバナとも云われているそう。由緒のある古い植物といえよう。もう一つの夏の花は夾竹桃である。これはブルーのわきと、小学校の花壇に比較的大きな株がある。夾竹桃はやさしげな名前、姿に似ず公害に強い植物のよしであるが、やはり戸外においてみる花のようで、花瓶にさすと思いがけない程のきつい香がして、何となく落ち着かない。8月のキャンパスはいろいろに乏しく、私のせまい行動半径では夾竹桃のほかハナツクバネウツギの淋しそうに花が咲いている位で、木々のみどりのみ

色濃く朝から蟬の音が暑気をかきたてるような気がする。

秋の訪れは金木犀の香りと共にはじまる。かって玄関前の金木犀は東洋一といわれ、おびただし  
いオレンジ色の花房は、少し大きさに云えばキャンパス中にその馥郁たる香りをただよわせた。こ  
の木も颱風で一度根こそぎ倒れてから次第に弱り、大槻先生に伺うと老化現象で幹の中に空洞が出  
来、バクテリアが巣くっているので、手のほどこし様がないとのことであった。最近この大木の横  
に若木が植えられたのは大槻先生の御寄贈によるものであるそう。とくに公害に弱いといわれ、  
この近年あまり沢山咲かなくなっていたが、去年は意外にも玄関前の木にも、とくに高校の前の木  
にはびっしりと花をつけた。10月1日夕方下校の際かすかな香りにさそわれて近よってみると、  
枝ごとと蕾がふくらんでいて胸のときめくような思いがしたものであったが、私の住む浦和では、  
1日おくれて10月2日の夕方にはじめて匂った。花の期間は約1週間で、終りころは冷たい霖雨  
にうたれて、香がパタリと遠のいてしまう。“キンモクセイ咲いて議論百出。”と10月15日の日  
経の夕刊に出ていたところを見ると、去年は都内各所で沢山咲いたらしい。

10月半ば、葉はまだ青々としているのに、梧桐の実は早くも色つき乾燥して、舞い落ちる体勢  
をととのえる。そのころ会計課の窓下のすずかけの実も茶色になる。プラタナスの日本語訳がすず  
かけなのか、古来すずかけと云いならわして来たのかさだかでないが、まことに云い得て妙な名を  
つけたものだと感心させられる。山茶花がボツボツ花をつけはじめのも10月半ばである。風に  
吹かれた紙屑がひっかかっているのかと思ってよくみると半ば開きかけた花であったりする。私が  
山茶花を好まないのは何となくピラピラした感じである上に、冬の訪れを思わせて気ぜわしさをか  
きたてられるからかもしれない。

## こ と ば と 文 字

福 井 英 一 郎

日常生活に使われることばや文字はお互の意志を伝達したり、記録として将来に残す重要な手段  
で、恐らく人間以外の動物にはみられないもので文化を構成する大きな要素と言ってもよいであろ  
う。それなのに今の日本ほどことばの乱れている時代も少ないであろう。

西洋文明が堰を切って奔流のように押寄せてきた明治初期のいわゆる文明開化の時期においてさ  
えも当時の新聞や出版物でみるかぎりでは今日ほど無秩序・無批判なことばの乱用は行われなかつ